

# パースのプラグマティズムと経営理論<sup>※</sup>

岩 田 浩

## I 分析の視点

周知のように、「プラグマティズム」は19世紀末から20世紀初頭にかけてアメリカ東海岸を中心に展開された思想運動から生まれたものである。ギリシア語で「行為」を意味する「プラグマ (*pragma*)」に語源をもつ、このプラグマティズムという言葉は、一般用語としては、当面の状況にあった様式で問題を迅速に処理し、事物を熟慮するよりも実質的な利益の追求に専念するような態度を意味し、しばしば「実用（ないし実利）主義」だとか「現実主義」と訳され、使用されることが多い。だが、プラグマティズムを1つの哲学・思想として、その成立過程から少し立ち入って見ていけば、それはこうした一般的な見方とは程遠いものであることが理解できよう。

本稿では、このプラグマティズムを通俗的な意味ではなく、あくまで哲学的な意味で根源からとらえ、その思想的特徴を浮き彫りにしたうえで、それが経営学の理論的・方法論的研究にどのような意味な視点を提供しうるのかを考察することにした。ところで、史実に即して言えば、プラグマティズムという言葉が初めて哲学界で広く紹介されたのは、1898年8月26日、カリフォルニア大学でウィリアム・ジェイムズ（1842～1910年）が行なった講演、「哲学的概念と実際的結果<sup>1)</sup>」においてである。この講演で、ジェイムズは、プラグマティズムの原理が1870年代にチャールズ・S. パース（1839～1914年）によって生み出されたものであることを明言している。したがって、プラグマティズムの思想の真髄を正しく理解するには、何よりもまず「パースの門」をくぐらなければなるまい。

そこで、ここでは、パースを軸にしてプラグマティズムが1つの哲学的理論として確立されていく過程を概観することから始めることにする。その際、まず、プラグマティズムの原点として一般によく知られている彼の初期の哲学的理論を取り上げ、プラグマティズムの根本的なテーゼを確認してから、1903年に彼が行なった、通称「プラグマティズムに関するハーバード講義」を

---

※ 本稿は、経営学史学会第11回大会(平成15年5月龍谷大学にて開催)の予稿集に掲載したペーパー、「プラグマティズムと経営理論」をほぼ原型のまま転載したものである。

1) James, W., "Philosophical Conceptions and Practical Results (1898)," in McDermott, J.J., *The Writings of William James: A Comprehensive Edition*, The University of Chicago Press, 1977, pp.345-362.

重点的に検討することにしたい。というのも、このハーバード講義は、一般にはあまり知られてはいないが、本論で明らかにするように、彼の思想の転換点に当たるだけでなく、プラグマティズムに内在する規範論的性格を初めて明確に打ち出したという点でも、極めて重要な意味をもつように思われるからである。こうした予備的な考察を踏まえたうえで、本稿の主題、すなわちプラグマティズムなる思想が経営学の理論研究にどこまで迫りうるのか、を見定めることにしよう。

## Ⅱ プラグマティズムの原点 ——パースの「探究の理論」と「意味の理論」——

### 1. パースの初期の2つの論文<sup>2)</sup>

パースは、1877年から翌年にかけて、科学論に関する6篇の連続論文を発表したが、そのうちの第1論文と第2論文が一般にプラグマティズムの思想的源流であるとみなされている。そこで、まず、これら2つの論文に目を通すことにしよう。

#### (1) 第1論文「信念の固定化<sup>3)</sup>」——探究の理論

かねてより反デカルト主義的な立場から超越的・無媒介的な直観主義的認識論を否定し、「既知の事実を考察することで未知の事実を発見することをめざす<sup>4)</sup>」推論に基づいた人間の思考と認識の優位性を指摘してきたパースにとって、推論の妥当性をいかにして確保するかは極めて重要な問題である。第1論文は、探究の理論を展開することにより、この問題に直接迫る。

パースによると、探究 (inquiry) とは「疑念 (doubt) が刺激となって信念 (belief) に到達しようとする努力<sup>5)</sup>」、端的に言えば、疑念から信念にいたる思考過程のことである。われわれは既存の信念、つまり行為への傾向性としての習慣を背景に行為した結果、この信念と行為との間に何らかの軋轢なり葛藤が生じた場合、不快で不満な状態に陥る。疑念とは、このような状態を示唆し、そこから脱却して、新たな行動習慣としての信念を確立するために探究が開始されるのである。したがって、探究過程では「既存の信念—行為—疑念—探究—新たな信念—行為……」といった一種の永続的な循環が見られるわけである。かくして、「探究の唯一の目的は信念の確定<sup>6)</sup>」、すなわち行為への傾向性としての習慣の確定を追求するところにあると考えられる。また、パースによれば、確たる信念に到達することは、「真であると考えられる信念」に到達することと同義語でもある。

では、信念はいかにして確定されるのであろうか。パースは、信念を確定するための4つの方

2) パースの初期の哲学的理論については、拙稿「パースの前期プラグマティズムに関する一考察」『大阪産業大学経営論集』第4巻第2号、2003年、でより詳細に論じたので参照されたい。

3) Peirce, C.S., "The Fixation of Belief (1877)," in Kloesel, C.J.W.(ed.), *Writings of Charles S. Peirce: A Chronological Editions*, Vol.3, Indiana University Press, 1986, pp.242-257.

4) *Ibid.*, p.244.

5) *Ibid.*, p.247.

6) *Ibid.*, p.248.

法を提起するが、そのうち最も客観的で妥当な方法と考えられるのが「科学の方法」である<sup>7)</sup>。それは、われわれの疑念を晴らすために、信念を外部に存在する「実在物」ないしは「実在」、すなわち個々人の気まぐれな思考によって影響されるものではなく、むしろすべての人に影響を与える（あるいは与えうる）ものによって決定する方法である。それゆえ、この方法に従ってなされる探究は、その探究に関連するすべての人にとって、その究極的結論が同じものになるであろう——ここに、探究のコミュニティにおける究極的合意をめざす、彼の真理論の核心を見ることができるといえる。かくして、「われわれの信念の確定」という探究の本性に最も適した方法は、われわれ自身の信念を客観的・社会的事実と一致させようとする科学の方法であることになる。パースは、実在論的立場に基づいて、このように結論づけるのである。

(2) 第2論文「われわれの観念をいかにして明晰にするか<sup>8)</sup>」——意味の理論

かように探究の目的が客観的妥当性の追求を通じた信念の確定であるならば、こうした信念の確定化をめざす認識作用はどのような方法で規制されるべきなのだろうか。この問いこそ、パースの第2論文の主題である。

彼によれば、われわれの思考を明晰にし、その意味を明確化するには、その思考がいかなる習慣を生み出すのかということを理解しさえすればよい。そこで、彼は、われわれの観念の意味を明確化するために、以下のような規則を提示するのである。

「われわれの概念の対象について、それが実際の意味をもつと考えられる効果としてどのような効果をもつと考えられるか、を考察してみよ。そのとき、これらの効果についてのわれわれの概念がその対象についてのわれわれの概念のすべてである (Consider what effects, which might conceivably have practical bearings, we conceive the object of our conception to have. Then, our conception of these effects is the whole of our conception of the object.)<sup>9)</sup>」。

要するに、この規則の言わんとすることは、われわれの認識内容は、行為と関係づけられることによって初めてその意味を有することができるということである。換言すれば、それは、認識する対象がわれわれの行為と実際に関係するとみなされる場合には、その行為の結果としてどのような反作用的な効果を有するであろうかを考えよ、そしてそこから有意義な認識と無意味な認

7) ここで、他の3つの方法について簡単に述べておく。第1は「固執の方法」であり、疑念に対する自分の気に入った解答だけを取り上げ強化する方法である。だが、それは社会的衝動に逆らうがゆえに、実践の場ではいつまでも貫くことができない。第2は「権威の方法」であり、特定の共同体や集団に共通した教義を創設し、それを集団的に固定化する方法である。だが、それは異なるより優れた教義を備えた他の共同体と遭遇することもありうるので、権威への疑念は絶えず燃り続ける。第3は「先天的方法」であり、人間に共通に備わっているとみなされる「理性に叶う」という基準に基づいて信念を確定する方法である。だが、理性に叶うということは「信じたい気持ちになる」ことを意味するにすぎず、結局この方法は探究を「趣味の啓発」のようにとらえている。

8) Peirce, C.S., "How to Make Our Ideas Clear (1878)," in Kloesel, C.J.W. (ed.), *op. cit.*, pp.257-276.

9) *Ibid.*, p.266.

識とを識別せよ、という規則である。例えば、「あるものが固い」という認識の意味は、「その対象に他の多くの物で擦りつけようとしても傷つくことがないだろう」という条件法的な形式に還元され、両命題は同一の意味を有することになる<sup>10)</sup>。つまり、この場合「傷つくことがない」という実際の効果・結果が「固い」という概念の意味基準なのであり、こうした実際の効果が考えられない概念は無意味な概念として棄却されねばならないことになるのだ。かかる規則こそ、いわゆる「プラグマティズムの格率 (pragmatic maxim)」の最初の定式化であり、その原型なのである。

## 2. パースの初期の理論とジェームズによるその拡大解釈

このように、パースは、デカルト主義に依拠した直観主義的認識論に代わる新たな認識論として、現前する疑念から逃れて信念を確定することに関わる「探究の理論」と、われわれの認識を明晰化するために認識内容をわれわれの行為の実際の効果・結果と関係づけて解釈すべきことを説く「認識の意味の理論」とを打ち立てた。この2つの理論こそ、プラグマティズムの最も根本的なテーゼであり、他のプラグマティストの思想にも基本的に通底するものである。その意味で、これら2つの論文は、一般にプラグマティズムの理論的礎石であるとみなされている。

さて、ここで、パースの初期の理論に見られる特徴を簡単にまとめておこう。①われわれの観念の意味を起りうる行為の実際の効果・結果との関係でとらえるという規則は、旧来の「理論と実践の二項対立」を克服し、両者の融合を図るものと考えられる、②探究の理論には、疑念を処理するための行為の習慣たる信念を確定する方法論が内包されている、③実際の効果の検証に際して、個人の特異な経験が重視されるのではなく、あくまでも公共的・社会的妥当性が強調されている、④観念の意味づけが未来の起りうる効果に基づいて事前になされるという点は、長期的観点から発展的・可能的な意味を想像的に探究するという理論特性を含意している。こうした諸点を読み取ることができよう。

もっとも、パースは、これら2論文の中では「プラグマティズム」という言葉を用いてはいない<sup>11)</sup>。冒頭で述べたように、かかる概念は、ジェームズの1898年の講演において初めて公に提唱されるのである。ジェームズは、この講演で、プラグマティズムの創設者がパースであることを認めたくえて、パースが提起した格率を真理の判定基準として利用する方法（すなわちプラグマティズムの真理論の礎）を提唱した。と同時に、彼は、かかる格率に拡大解釈を加えることによって、「実際の効果」のテストには、あらゆる人が経験する一般的・普遍的な経験だけでなく、特殊な経験（例えば宗教的・審美的経験）も含まれることを強調したのである<sup>12)</sup>。これにより、

10) Cf. *Ibid.*

11) これらの論文の骨子は、1870年代初めにマサチューセッツ州ケンブリッジで散発的に開催された若手研究者の研究会、いわゆる「形而上学クラブ」で既にパースによって提唱されていた。そのメンバーの1人であったジェームズによれば、その席でパースは「プラグマティズム」という言葉を使用していたようである (Cf. James, *op. cit.*, pp.348.)。

12) Cf. *Ibid.*, pp.348-349.

プラグマティズムは勢い唯名論に傾斜し、主観主義的・相対主義的解釈の余地を多分に残すことになってしまった。

パースは、自分が約20年前に産み落としたプラグマティズムの原理がジェイムズによってこのように拡大解釈され、普及していくことに対して違和感を覚え<sup>13)</sup>、これを機に自らの初期の理論を再定式化する道へと歩を進めるのである。その第一歩になったのが、ジェイムズらの尽力によって実現した、ハーバード大学でのプラグマティズムに関する7回の連続講義(正式な総題は『正しい思考の原理と方法としてのプラグマティズム<sup>14)</sup>』)である。次に、パトリシア・A. タリッシュによって編集された最新のテキストを基に、この講義内容に一瞥を加えることにしよう。

### Ⅲ パースによるプラグマティズム再定式化の始動

#### ——「プラグマティズムに関するハーバード講義」をめぐる若干の考察——

1903年の3月から5月にかけて開かれたこの連続講義において、パースは初期の自説への哲学的反省を踏まえたうえで、自らのプラグマティズムの全体像を初めて披瀝した。その意味で、この連続講義は、パースの思想の転換点に当たる極めて重要な地位を占めるのである。ここでは、そこでの中心的主題である「規範学の理論」と「アブダクションの論理」を取り上げ、検討することにしよう。

#### 1. パースの自己反省と規範学の理論としてのプラグマティズムの構想

パースは、連続講義を始めるに当たり、その第1講義において、まず自らの初期の認識論に哲学的反省を加える。既に述べたように、パースの初期の探究の理論では、探究とは、何らかの心理的欲求を契機に疑念を取り除き、確たる信念を確定することであった。このようにして確定された信念は、確かに行為の指針にはなるが、必ずしも行為を客観的实在の把握に向かわせる保証はない。つまり、彼の初期の理論では、心理学的な観点から信念と行為との関連は説明されていても、信念と行為の目的との関連は必ずしも十分に把握されていなかったのである。その意味で、彼の初期の理論には、心理学的・唯名論的傾向が依然として残存していたのだ。

このように、パースは、プラグマティズムに関する自分の最初の論文が心理学的な原理に依拠していたことを率直に認めたとうえで、次のように明言する。「論理学の基礎を心理学に置こうと

13) プラグマティズムをめぐるパースとジェイムズの葛藤については、拙稿「ジェイムズのプラグマティズムに関する覚書」『大阪産業大学経営論集』第4巻第3号、1996、で若干考察したので、それを参照されたい。

14) Peirce, C.S., *Pragmatism as a Principle and Method of Right Thinking: The 1903 Harvard Lectures on Pragmatism* (1903), edited by Turrissi, P.A., State University of New York Press, 1997. この連続講義は、すべての公職を解かれ、1887年以後ペンシルベニア州の片田舎に引籠り、極貧と病に喘ぎながらも黙々と研究活動を続けるパースへの親友ジェイムズからの支援の賜物であったと言える。

する試みは、本質的に浅薄であるように思われる<sup>15)</sup>」, と。当然, この点を改善するには, 論理学を心理学から明確に切り離し, それを何らかの別の哲学的原理に基礎づける必要があるだろう。そこで, パースが提唱するのが「規範学 (normative sciences)」の理論である。

彼の唱える規範学とは, 「現象と目的——すなわち, おそらくは真理, 正義, 美——との関係に関する普遍的かつ必然的法則を考察するものである<sup>16)</sup>」。この簡潔な定義から読み取れるように, 「事物と目的との合致に関する法則の学」としての規範学には, 美学, 倫理学, 論理学が含まれることになる。彼は言う。「美学は, その目的が感受的な質を表現することであるような事柄を考察し, 倫理学は, その目的が行為の内にあるような事柄を考察し, 論理学は, その目的があるものを表象することであるような事柄を考察する<sup>17)</sup>」, と。では, これら3者の関係は, いかなるものなのであろうか。手短に見ていくことにしよう。

パースによると, 探究における推論過程とは, 決して無意識的なものではなく, 行為者自身によるその推論の主観的な批判と承認とを含んだ自己制御的な過程であり, それゆえ意志的な行為である。人は推論を働かせるときは常に, あらゆる類比的なケースを通して妥当するような結論を引き出すという論理法則を意識して行なう。すなわち, 推論は, 単なる個人的信念に依拠した自己反省的な意識下ではなく, 普遍的客観性を具有した結論に至るべく, 常に他の類比的な全体への参照を意識して行なわれるのである。探究を構成する推論とは, このような客観性を想定した自己制御的な意志的行為でなければならないのだ。だとすれば, このような意志的行為の承認は一種の道徳的承認であるとみなせよう。ここに, 論理学と倫理学の接点が見られるのである。

パースは言う。「倫理学は, われわれが熟考して採用する用意のある行為の目的とは何かに関する研究である。正しい行為とは, われわれが熟慮して採用する用意のある目的に合致した行為である。……正しい人とは, 自己の情念を制御し, それらを彼自身が思慮に基づいて究極的なものとして採用する用意のある目的へと一致させようとする人である<sup>18)</sup>」, と。論理学は, このような行為の合法的自己制御に関わる倫理学を前提としなければならないのだ。かくして, 「論理的推論者は, 自己の知的活動において多大な自己制御を行なう推論者であるから, 論理的な善はまさしく道徳的な善の特種なものにほかならない<sup>19)</sup>」のである。

では, 倫理学と美学の関係とは, いかなるものなのだろうか。これに関して, パースは次のように言明する。「熟慮して採用された……行為の究極的目的は, 他の外的考慮とは無関係に, それ自体においてその価値を理性的に顯示する事態でなければならない。それは称賛すべき理想でなければならない, そのような理想が有しうる唯一の正しさ, すなわち美的善のみを有するものでなければならない。こうした観点から, 道徳的善は美的善の特種であると考えられる<sup>20)</sup>」, と。

15) *Ibid.*, p.116.

16) *Ibid.*, p.208. パースは, 規範学の理論について第5講義を中心に論じている。

17) *Ibid.*, p.212.

18) *Ibid.*

19) *Ibid.*

20) *Ibid.*, p.213.

ここで、パースが想定する美とは、「ある全体を構成する数多くの部分が互に関係し合って1つの積極的な、単純な、直接的な質をその全体に分与しているもの<sup>21)</sup>」、端的に言えば、多様な部分からなる全体状況における統一的な質を意味しており、このような美的質を知的に感知することが美的善にほかならないのである。彼によれば、「われわれは美を享受している間は、感覚の全体性に接している。……それは一種の知性的な共感、つまり、ここにわれわれの理解する1つの感じが存在するという感覚、すなわち理性的な感知<sup>22)</sup>」なのである。倫理学が指示する行為の究極的目的は、要するに、このような全体的調和を志向する美的善、美的理想に帰着するのであり、その意味で、倫理学は美学に依拠するのである。私見では、ここに、ジョン・デューイへと受け継がれる、美と善の融合を説く「プラグマティズム美学—倫理学」の原型を見ることができる。

このように、パースは、規範学の理論を提唱することによって、論理学が倫理学を基礎とし、倫理学が美学に基づくものであることを明確に示すのである。彼は言う。「プラグマティズムがわれわれに教示するように、われわれが何を考えるかはわれわれが行為する心構えがあるという観点で解釈されるべきであるならば、論理学は……倫理学の応用でなければならない。しかし、われわれは、われわれが称賛する用意があるものに対するわれわれの信条をまず作り上げるまでは、倫理学の秘密への糸口を得ることはできないのだ。……要するに、倫理学は……ある理想が称賛されるべきものであるということ構成するのは何かを厳密に定義しようとする学〔すなわち美学〕に依存しなければならないのである<sup>23)</sup>」、と。

かくして、パースの初期の理論に見られた欠陥、すなわち論理学を心理学に依拠させるがゆえに事実に認識と行為の目的との連関を十分にとらえ切れなかった点は、行為の究極的目的を明らかにする規範学の理論に立つことによって改善されるのである。ところで、このように、探究の究極的目的が美的善による具体的事実に関わる合理性の感知にあるとするならば、その動因は探究過程のどこに現れるのであろうか。パースは、それを「アブダクションの論理 (logic of abduction)」に求めるのである。

## 2. アブダクションの論理としてのプラグマティズム

パースによると、推論には、演繹、帰納、そしてアブダクションという3つのタイプがあるが、

21) *Ibid.*

22) *Ibid.*, pp.198-199.

23) *Ibid.*, pp.118-119. [ ] 内とゴシックによる強調は引用者による加筆。パースは、同様のことを別のところで次のように述べている。「美学は理想、すなわち隠されたいかなる理由もなしに客観的に称賛されるものに関する学である。……倫理学、すなわち正と誤に関する学は、最高善を決定するために美学の助力を求めなければならない。……論理学は、自己制御された、熟慮された思考の理論であり、それ自体、その原理を倫理学に求めなければならない」(Peirce, C.S., "An Outline Classification of the Science (1903)," in *The Peirce Edition Project*, (ed.), *The Essential Peirce: Selected Philosophical Writings*, Vol.2, Indiana University Press, 1998, p.260.)

わけてもアブダクションは「説明的仮説を形成する過程であり、それは何らかの新たな観念を導入する唯一の論理的操作である<sup>24)</sup>」という意味で、他の2つよりも際立っている。というのも、「帰納は真偽の値を決定するにすぎないし、演繹は単に純粋な仮説の必然的帰結を引き出すにすぎないからである<sup>25)</sup>」。パースによれば、これら3つの推論形式の関係は、アブダクションの示唆から演繹が予見を引き出し、その予見が帰納によってテストされるという様式で段階的に関連づけられるが<sup>26)</sup>、前述したように、探究の究極的目的が多様な部分からなる全体状況の中から1つの統一的な質を感知することであるとすれば、仮説形成に関わるアブダクションこそが探究過程の最も原初的で本質的な段階であるとみなせよう。かくして、「プラグマティズムに関わる真の学説はアブダクションの真の論理以外にはありえない<sup>27)</sup>」のである。では、アブダクションの特性とは、一体いかなるものなのだろうか。パースの見解を一瞥してみよう。

「アブダクションの示唆は、あたかも閃光のように生じる。それは1つの洞察の働きであるが、極めて可謬的な洞察である<sup>28)</sup>」と言われるように、アブダクションは天啓の閃きのように現れる受動的な作用であると同時に、探究者の主体的な洞察の結果に関わる能動的な作用でもある。こうしたアブダクションの推論は知覚判断と重なる部分が多いが、前者は後者に比して、既存の言語的規約や意味論的規則に縛られることなく主体的に具体的現象を解釈・翻訳し、仮説を意識的に形成しうる点で、両者の間には決定的な差異が見られる。別言すれば、「アブダクションによる示唆は、その真理性を疑問視することが可能な、また否定することさえ可能な示唆である<sup>29)</sup>」という意味で、探究者の主体性に重きが置かれているのである。

ところで、パースは、アブダクションの論理形式を仮言的三段論法で表示するが<sup>30)</sup>、このような形式でとらえたとき、観察事実を論理的に説明するような仮説は無数に存在するものと考えられるから、仮説選択には常に誤謬の可能性がつきまとうことになる。だが、誤謬に恐れてばかりしては大胆な仮説を立てることはできない。したがって、論理的形式からはほとんど無限と

24) *Ibid.*, p.230. パースは、アブダクションについて第6講義の後半と第7講義を中心に論じている。

25) *Ibid.*

26) Cf. *Ibid.* 最晩年にパースは、推論を1つの過程とみなし、その第1段階を仮説形成に関わるアブダクション、第2段階をその仮説をテストしやすい形に精緻化することに関わる演繹、そして第3段階をその仮説の妥当性の検証に関わる帰納、としてとらえている (Peirce, C.S., "A Neglected Argument for the Reality of God(1908)," in *The Peirce Edition Project*, (ed.), op.cit., pp.440-445. ただし、ここでは「アブダクション」は「リトロダクション (retroduction)」という言葉に置き換えられている)。

27) *Ibid.*, p.239.

28) *Ibid.*, p.242.

29) *Ibid.*, p.245.

30) Cf. *Ibid.* パースはアブダクションを次のような論理形式で定式化する。「驚くべき事実Cが観察される→しかし、もしAが真であるならば、Cであることは当然の事柄であろう→したがって、Aは真ではないかと考える理由が存在する」。これを単純な例で言い換えれば、「驚くべき事実として、魚の化石のようなものが内陸で発見された→だが、もしこの一帯がかつては海だったという仮説を立てれば、この事実は納得がいく→したがって、この一帯はかつて海だったのだと考える理由は十分ある」。



思われる可能性の中から、ある現象を説明するために、これまで蓄積されてきた知識を頼りに、妥当な仮説を想像的に打ち立てていくところに、アブダクションの論理の特性が存するのである。

このように見てくると、アブダクションの論理は、仮説選択の規準に役立つプラグマティズムの格率と密接に繋がるのが理解できる。というのも、既に明らかにしたように、プラグマティズムの格率は、概念の意味を起こりうる行動の結果としての事実のレベルで押さえるところに着目することによって、探究過程における仮説形成の目安を提供するものだからである。パースによれば、「これこそがプラグマティズムの格率の真の狙い」であり、結局「プラグマティズムの問題を注意深く考えれば、それはアブダクションの論理<sup>31)</sup>」に行き着くのである。

以上のように、パースのハーバードでの連続講義は、プラグマティズムの原点になった初期の自説に対する反省から、論理学—倫理学—美学の三項関係からなる規範学の理論をその哲学的原理として新たに打ち立て、そこから探究理論の核心に迫るべく、探究過程における重要な契機としてアブダクションの論理を際立たせるという形で展開された、全く独創的なものであった。パースは、この連続講義の末尾を、プラグマティズムの認識論の特質を巧みに突いた次のような一文で締め括っている。「あらゆる概念の要素は、知覚という門を通して論理的思考に入り、目的的行為の門を通してそこから出て行く。この2つの門でパスポートを示すことのできないものは、理性の認可を受けていないものとして逮捕されるべきである<sup>32)</sup>」、と。さて、この連続講義で自説の全体像を描出したパースは、その数年後、自らの立場を「プラグマティズム (pragmaticism)」と称し、他の同時代のプラグマティストとは一線を画した独自の路線を歩むようになる<sup>33)</sup>。最晩年の彼は、これまで自らが提唱してきた諸説——連続性の原理、批判的常識主義、スコラ的實在論、記号論など——と関連づけながらプラグマティズムを哲学的に究めることに傾倒し、その生涯を終えるのである。このように、プラグマティズムの思想には、パースのエスプリが深く刻み込まれているのである。

#### Ⅳ プラグマティズムと経営理論

##### ——プラグマティズムが経営理論に提供しうる有意味な視点：1つの見通し——

これまで、パースの思想を軸にして、プラグマティズムが1つの哲学的理論として確立されていく過程を概観してきた。その中で明らかにしたように、パースは、その初期の理論においてプラグマティズムの根幹をなす認識論的テーゼを提起しただけでなく、晩年の「ハーバード講義」においてそれを規範学の理論として展開していく道筋をも示してくれたのである。従来、プラグ

31) *Ibid.*, p.249.

32) *Ibid.*, p.256. ゴシックによる強調は引用者による加筆。

33) Cf. Peirce, C.S., "What Pragmatism Is (1905)," in The Peirce Edition Project (ed.), *op.cit.*, pp.334-335.

マティズムと言えば、一般に前者の思想的特徴が目されがちであるが、私見では、後者も含めてより包括的にとらえなければ、その思想の本性を正しく理解することができないように思われる。そこで、ここでは、このような広いパースペクティヴに立って、プラグマティズムの思想とほぼ同時期に生成してきた経営学の理論研究との接点を探るといって、本稿の主題に移ることにしたい。もっとも、このような大きなテーマを体系的に論じるのは私の手に余る問題なので、以下では、これまでの考察から見て取れるプラグマティズム特有の認識論、道徳論、および知識論に論点を絞り込み、それらが経営理論に提供すると考えられる有意味な視点を断片的に取り上げることで、1つのささやかな見通しを示すに止めることにしたい。

### 1. プラグマティズムの認識論と経営理論

まず、プラグマティズムの認識論に着目してみよう。既に見たように、その基本的特性は、「われわれの概念の意味を起りうる行為の実際的効果との関係で常にとらえよ」とするプラグマティズムの格率に典型的に見られるように、人間の「思考」を、自我の理性的直観をもってそれ自体で意味を生み出す無媒介的な独立した内的過程とみなす（＝近代的認識論）のではなく、本質的に「行為」と結びついたものとして把握するということである。したがって、そこでは、思考と行為、理論と実践の二項対立という近代的な区別はもはや存在せず、むしろ両者は密接不可分なものとして関連づけられている。こうした実践志向的な見方は、テイラーを嚆矢とするアメリカ経営学の諸理論にも顕著に見られる認識論的前提であり、ここでは多言を要しまい。

ところで、この「思考と行為（＝理論と実践）の密接不可分性」という点を先に引用したパースの「ハーバード講義」における最後の一文と重ね合わせてみたとき、プラグマティズムの経験論の特徴がより鮮明になるであろう。この一文の要点は「概念は常に知覚と行為の2つの門を通過しなければならぬ」というものであったが、それは端的には「知覚—思考—行為」という認識過程のサイクルに置き換えることができよう<sup>34)</sup>。こうしてみると、人間が受動的に環境から受容する感覚的刺激の知覚から観念が成り立つとする伝統的な経験論に比べて、プラグマティズムはその認識過程の後段に行為に基づく意味論をも連結するがゆえに、人間が能動的に環境に介入し、そこから得られる知覚体験を契機に行動の指針になりうるような有意味な観念を主体的に形成していく、能動的な経験論に傾斜するものであると理解できる。このように、人間の認識作用を受動的な環境適応のみならず具体的環境に対する介入を通じた主体的な適応過程とみなすプラグマティックな視点は、戦略論を含む経営の環境適応の理論に1つの哲学的な根拠を提供しうるであろう。

さて、こうしたプラグマティズムの認識作用を先導し、それを動態化せしめる役割を果たすのが「アブダクションの論理」である。既に述べたように、アブダクションとは、パースによって、演繹（＝ある仮説の必然的帰結を確定する操作）と帰納（＝この帰結を観察事実と照らして検証

34) こうしたとらえ方は、上山春平に倣った（『上山春平著作集』第1巻、法蔵館、1996年、262-263ページ）。

する操作)の前段に位置づけられたものであり、未だ説明のつかない不可解かつ不規則な現象の中から1つの説明的仮説を見出すための方法的過程ととらえられる<sup>35)</sup>。そこにおいては、人間のもつ閃きや直観といった想像力が多分に介入し、確実性には劣るが、既知の事実や体験を基にして新たな知識を感知・発見することで知識の拡張に繋がる可能性が多分に含まれている。こうしてみると、パースの論理的推論過程は、従来、科学の埒外であるとみなされてきた「発見の論理」をその出発点に据えることで、前・非論理的思考過程と論理的思考過程の相互的連関を重視するものと理解できる。このように、言語では表現し難い経験的知識を認識作用の起点に据えるプラグマティズムの探究の理論は、組織の意味創造やイノベーションといった知識創造に関する経営理論に1つの科学方法論的な視点を投げ掛けるものであると考えるのは通俗的であろうか。

以上、プラグマティズムの認識論を手がかりに、経営理論との接点を探ってきた。次に、焦点を、パースの規範学の理論を端緒とするプラグマティズムの道德論に移し、その経営学的意義を考えることにしよう。

## 2. プラグマティズムの道德論と経営理論

先に見たように、パースは、人間行為の理想目的を明らかにする規範学の理論において、論理学が倫理学を基礎とし、倫理学が美学に基づくということを明らかにしたが、プラグマティズムの道德論を考察する場合には、特に後者、すなわち倫理学の基礎を美学に求めるという点に着目する必要がある。私見では、この点をよりよく理解する1つの鍵が、プラグマティズムの語源に関するパースの見解の中に隠れているように思われる。そこで、ここでは、これを手がかりに議論を進めることにしよう。

カントに精通し、彼の用語で物事を考える習性が身についていたパースは、晩年「プラグマティズムという言葉はドイツ語の *pragmatisch* から着想した」と告白している<sup>36)</sup>。ところで、カントによれば、道德原理には *moralisch-praktisch* な法則と *pragmatisch* な法則の2種がある<sup>37)</sup>。前者は純粹理性に基づき、感性的な衝動や経験的条件を全く含まないがゆえに、ア・プリオリに規定された定言命法の形をとるのに対して、後者は経験的原理に基づき、「もしある目的を欲するならば、それにふさわしい行為をせよ」といったア・ポステリオリな仮言命法の形をとる。カントは、このように類別したうえで、*moralisch-praktisch* な定言命法をその哲学体系の礎に据

35) アブダクションによる仮説発見とて因果的了解に訴えなければ説得力はない。パースが、アブダクションの後に演繹と帰納を据えるのには、こういった認識があるものと思われる。

36) Peirce, "What Pragmatism Is," pp.332-333.

37) カント著、篠田英雄訳『純粹理性批判(下)』岩波文庫、1962年、91-111ページ。カントは、*moralisch* (道德的)な法則と *pragmatisch* (実用的)な法則を並置し、*praktisch* (実践的)な法則をその上位概念に置いている。しかし、「道德的法則のみが純粹理性の実践的使用に属し、また規準をもち得るのである」(94ページ)との言明からも明らかなように、*moralisch* と *praktisch* はほぼ同一的にとらえられているので、ここでは説明の便宜上、両概念を一括りにして、*pragmatisch* と対照させることにした。

えた。だが、経験論を重視するパースの目には、praktisch という言葉は「足元にしっかりした基盤があることを確信できない思考領域に属する<sup>38)</sup>」ものにしか映らない。そこで、彼は、カントを逆手に取り、pragmatisch な仮言命法を核にし、われわれが有する概念の意味を実際の・経験的な行為との関わりにおいて分析する方法を模索したのである。こうして、彼はプラグマティズムという名称に辿り着いたのだ。このように、プラグマティズムが語源的に見て pragmatisch な法則に規定されるということは、当然その道徳論も経験的条件を含む「仮言命法の学」として展開されねばならず、ここに美学と倫理学が結びつく余地が生まれるのである、と推察できるのである。

このようなパースの見解を踏まえ、プラグマティズムの道徳的行為論の輪郭を素描すれば、おおよそ次のようになるであろう。すなわち、それは、現実の社会的状況の中で生を営む人間が、直面する具体的な全体状況の中に浸透する統一的な質（一種の常識知）を感受し、そこからそれに抵触しない道徳的理想目的を主体的に形成し、それに即した行為を実践していくことであると。

この簡潔な定義から、以下のようなプラグマティズムの道徳論の特性が浮かび上がるであろう。まず第1に、行為の倫理的規制の基礎に美的質の感受といった一種の道徳的感情が措定されるという意味で、そこには経験主義的観点が含まれているということである。ここで留意すべきことは、このような経験主義の容認は、決して利己主義的快樂主義とは直接には結びつかないという点である。なぜなら、パースが示唆したように、ここでの美的質とは「美にして善なるもの」としての美的善であり、それは客観性を想定した自己制御的な意志的行為たる道徳的善の基礎づけにはかならないからである。その意味で、プラグマティズムの道徳論は、経験論(=道徳的感性)と合理論(=道徳的理性)の結合の上に成り立つものとみなすのが妥当であるかもしれない。第2に、そこには道徳的価値を主体的に創造する自由意志と、その価値に即した責任ある行動とを両立させようとする傾向性が認められるということである。プラグマティズムの見地に立てば、道徳的価値とは外部から課された受動的なものではなく、行為者自らが主体的に形成するものであり、当然その価値を遵守する責任とその行為の結果責任を引き受ける覚悟が徹底的に求められる。もちろん、一旦設定された道徳的価値とて、それは永遠不変な絶対的なものではない——そこには、いわゆる道徳的価値の決定不可能性の問題がつきまとうわけだ。人間を取り巻く道徳的状況は多様性と流動性を包摂した多元的で動的な状況である。こうした可変的な状況に適応すべく、人間は自己の道徳的行為を律する価値基準を絶えず見直し、必要とあればそれを再構成していかなければならない。かように、プラグマティズムの道徳論は、動的な連続的発展性をその本性に含むのである<sup>39)</sup>。

38) Peirce, "What Pragmatism Is," p.333.

39) ここに、決定不可能性と無限責任を柱とするジャック・デリダの倫理思想との親近性が垣間見られる (Cf. Derrida, J., "Remarks on Deconstruction and Pragmatism," in Mouffe, C.(ed.), *Deconstruction and Pragmatism*, Routledge, 1996, pp.86-87.)。

以上が、プラグマティズムの道德論に認められる大まかな特性である。ところで、社会全般にモラルを問い直す機運が高まる中、経営理論においても経営倫理学が確たる地位を占めるようになり、道德に関する理論的な知識なり教養が勢い要求されるようになってきた。ただし、従来の経営倫理学の理論研究においては、倫理学の歴史において既に正当化された幾つかの道德原理(通常、功利主義、権利、正義)を経営状況に形式的に適用していく応用倫理学的手法が支配的であり、行為主体としての経営が道德的価値を創造するという主体的な視点がやや等閑にされてきた感は拭えない。上述した、プラグマティズムの道德論は、この点を改善する1つの有効な手立てになるであろう。事実、1990年代後半以降、サンドラ・B. ローゼンソールとロージン・A. ブックホルツは、プラグマティズムの立場から従来の経営倫理学の研究手法を批判し、それをより動的に展開していくための道筋を示すことに意欲的に取り組んでいる<sup>40)</sup>。かように、具体的状況の中で行為のあり方を自省し再構成していくプラグマティックな道德論は、経営の道德的問題を考察するうえで1つの理論的・哲学的根拠になりうるであろう。

### 3. プラグマティズムの知識論と経営理論

最後に、プラグマティズムの知識論について簡単に触れておこう。これまで、その認識論と道德論を中心に見てきたが、それらに通底するプラグマティズムの基本的な精神は、知識や理論を根本的に基礎づける確実な基盤や永遠不変の本質など存在しないという主張——こうした主張は、近年のネオ・プラグマティズムにおいて「反基礎づけ主義」と名づけられ継承されている——である。かように、基礎づけ主義や絶対性を放棄したプラグマティズムは、その代替案として徹底的な可謬主義(fallibilism)を取り入れるのである。この立場に立てば、人間が獲得しうる知識はすべて、それがいかに現在絶対確実な真理に見えても決して最終的な真理とは断定できず、常に誤りが発見され、新たな解釈と批判にさらされ、修正される可能性を残したものでなければならない。こうして見ると、可謬主義は、知識に関する「連続性の原理」に繋がるものと理解できる<sup>41)</sup>。すなわち、われわれ人間は、過去の知識や理論を(肯定的ないしは否定的に)糧に

40) ここで、2人の代表的な共著をあげておく。Buchholz, R.A., and S.B. Rosenthal, *Business Ethics: The Pragmatic Path beyond Principles to Process*, Prentice-Hall, 1998. Rosenthal, S.B., and R.A. Buchholz, *Rethinking Business Ethics: A Pragmatic Approach*, Oxford University Press, 2000. 岩田浩・石田秀雄・藤井一弘訳『経営倫理学の新構想』文真堂, 2001年。尚、ローゼンソール達の所論の概要については、拙稿「経営倫理学のプラグマティズム的転回とは何か(上)(下)」『大阪産業大学経営論集』第3巻第3号, 第4巻第1号, 2002年, を参照されたい。

41) パースは次のように述べている。「連続性の原理は、客観化された可謬主義の観念である。なぜなら、可謬主義とは、われわれの知識は決して絶対的なものとはならず、いわば常に不確実性と非確定性との連続体のうちに浮遊しているという理論だからである。そして、連続性の理論とは、一切のものがそのように連続体のうちに浮遊しているという説なのである」(Hartshorne, C., and P. Weiss (eds.), *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, Harvard University Press, 1931, 1. 171.)。このようにパースは、可謬主義を、人間の知識に関する側面と、あらゆる存在を規定する存在論的側面の二面からとらえている。

しながら、未来において修正される可能性に開かれた仮説的な知識を新たに打ち立てることで、不確実な現在を生きていかねばならないのだ。このように、プラグマティズムは、可謬主義に基づいた知識論に立つことにより、知識を、過去—現在—未来の時間的連関の中で発展する可能性を孕んだ可変的な過程であるととらえるのである。

このような知識観は、経営の発展の論理ともよく符合するように思われる。かつて山本安次郎教授が言われたように、経営存在は時空的制約を全く受けない不変的な存在ではなく、歴史的社会的に発展する主体的な存在、すなわち発展的存在である<sup>42)</sup>。発展的存在としての経営は、単に量的拡大に関わる成長の論理を追求するだけではなく、「質的（＝価値的）向上」ないしは「知的能力の発達」といった意味での発展の論理をも追求するものでなければならない<sup>43)</sup>。そのためには、もちろん、既存の知識にいつまでも拘泥するわけにはいかない。経営は過去の知識や事実を踏まえながらも、現在の状況に主体的に適応すべく、過去に反省を加え、新たな知識を自由に創出していくことで、より良き未来へ向けて発展していかねばならないのだ。こうした経営発展の論理の基底には、プラグマティズムの可謬主義的知識観と同様、「自然法則のような時空を超越した知識など本来ありえない」との深い信念が存在していよう——否、もしそのような不変の知識がありうるなら、経営発展論の問題など殊更取り上げる必要もあるまい。また、質的向上を志向する発展の論理には、ジェイムズからデューイへと流れるプラグマティズムの「改善論（meliorism）<sup>44)</sup>」のニュアンスも感じ取られる。このように見てくると、より良き方向へ向けての未完のプロジェクトとしての経営発展の論理は、一面において、プラグマティックな知識論によって根拠づけられうるものと言えるのではなかろうか。

## V 結 言

### ——経営理論における思想的基盤としてのプラグマティズム——

要約しよう。プラグマティズムが認知されるようになったのは、19世紀から20世紀にかけての転換期であり、それはちょうどアメリカにおいて経営学が生成した時期とほぼ重なり合う。この

42) 山本安次郎著『経営学研究方法論』丸善、1975年、第4章、第5章。山本安次郎・加藤勝康編著『経営発展論』文真堂、1997年、第1章。

43) 山本・加藤編著『経営発展論』9ページ。

44) ジェイムズによると、改善論とは、世界の救済が必ず訪れると考える楽観論と世界の救済を不可能なことと考える悲観論の中間に位置し、真理の多数性・多様性を認めながらも、それらが人間にとって有用な理想に向けて収斂していく可能性を諦めない教説を意味する（James, W., *Pragmatism* (1907) and *The Meaning of Truth* (1909) (one-volume edition), Harvard University Press, 1975, p.137.）。また、デューイは改善論を「知性を励まして、善の積極的な手段や手段の実現における障害を研究させ、条件の改善への努力を進めさせるもの」と規定したうえで、それは「自信と正当な希望とを目覚めさせる点で楽観論とは異なる」と述べている（Dewey, J., *Reconstruction in Philosophy* (1920), in Boydston, J.A. (ed.), *John Dewey : The Middle Works*, Vol.12, Southern Illinois University Press, 1988, p.182.）。

時代的相似性ということもあってか、プラグマティズムは、しばしば、アメリカ経営学の思想的バックボーンであるとみなされてきた。とはいえ、これまでの経営学がプラグマティズムに寄せてきた関心と言え、一般には、その思想に流れる実践志向性がメインであり、他の思想的特徴にはそれほど光が当てられてこなかったように思われる<sup>45)</sup>。果たして、このような一面的で皮相的なとらえ方だけでプラグマティズムを限定してしまって良いのであろうか。本稿の出発点には、このような問題意識があった。

そこで、ここではまず、プラグマティズムとは本来いかなる哲学・思想なのかをより深遠かつ正確に理解するために、その創設者であるパースを中心に簡単な思想史的考察を加えることにした。一般に、プラグマティズムと言え、パースの初期の認識論、すなわち「探究の方法論」と「意味の理論」が衆目を集めがちであるが、私見では、晩年の「ハーバード講義」における規範学的転向以降をも加味しなければ、彼の思想、ひいてはプラグマティズムの全体像を正しくとらえることはできないように思われる。それゆえ、ここでは、極めて簡略ではあったが、パースの初期の論文とともに「ハーバード講義」にも目を通すことによって、プラグマティズムの思想的特徴をより包括的に描くように心がけた。そして、このような予備的な哲学的考察から、プラグマティズム特有の認識論、道徳論、および知識論を抽出し、それらが経営理論にいかなる有意味な視点を提供しうるかをめぐって若干の考察を展開した。そこでの一応の帰結として、プラグマティズムは経営理論に、理論と実践の統合を促すだけでなく、環境への主体的な適応過程、感性と理性を融合した包括的な推論的認識過程、美と善、自由と責任の結合の上に成り立つ価値創造的な道徳過程、さらには可謬主義に基づいた知識の発展過程といった知見をも提供しうる、ということを明らかにした。

このように、プラグマティズムは、認識論や知識論のレベルに止まらず、道徳論のレベルにおいても経営理論を支える1つの有効な思想的基盤であると考えられるのである。本稿は、「哲学の側から経営理論を取り上げる方法<sup>46)</sup>」を用いて、この点を明示するためのプロレゴメナであった。

---

45) プラグマティズムと経営理論との思想的関連を考察するうえで有益なのは、村田晴夫教授の一連の研究である(例えば、「バーナードのシステム論とプラグマティズム」加藤勝康・飯野春樹編『バーナード』文真堂、1987年。「ウィリアム・ジェイムズからバーナードへ」飯野春樹編『人間協働』文真堂、1988年。「『組織と倫理』の方法論的基礎」『経営学論集(龍谷大学)』Vol.39, No.1, 1999年、をあげることができる)。また、最近、スペインの経営学者、ファン・フォントロドナは、パースの思想に関する徹底的考察を基に経営理論の再構成を試みている(Fontrodona, J., *Pragmatism and Management Inquiry*, Quorum, 2002.)。本稿は、こうした先行研究に触発されるところが大きい。

46) 「第11回大会の企画」『経営学史学会通信』第9号、2002年、7ページ。